
ある日の二人

だしまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の二人

【Nコード】

N3310Z

【作者名】

だしまき

【あらすじ】

ある日の二人をのんびりと。百合&駄文注意。

二人乗り（前書き）

滅多に更新しません。設定とか間違えてるかも。ヤマもオチも中身も何もありません。それでもいい方はどうぞ。

二人乗り

冥府の深部、『タルタロス』から二人の魔女が生還してから数日が過ぎた。

途中、この世のものとは思えない異形の怪物に出くわしたり、リアルに三途の川を渡りかけたりもしたが、彼女達は奇跡的に現世に帰ってくる事が出来た。

しかし、そんな人の身には余りある業を成しえた二人の魔女は、再び窮地に直面していた。

「迷いましたわね……」

「あちゃー……こつちじゃなかったか」

鬱蒼とした木々が生い茂る森のどこかに、二人の魔女はいた。

一人はウィッチ。いかにも『魔女』と言わんばかりの茶色い三角帽子を被り、箒を片手に持っている。薄茶色のカールがかかった長い髪に、ぱつちりと開いた眼。どこかまだあどけなさを残す、人形のように整った顔。熟れた果実のような胸を中心だけ隠すような面積の小さい布をまとい、下はショートパンツを穿いている。かなり露出度の高い服装だ。その小麦色の肌や、豊満な胸、艶めかしいくびれやふとももが、彼女の子供のような顔とは相反し、色香を匂わせていた。

もう一人はバーバ・ヤーガ。彼女もまた、乳白色を基調とした三角帽子を被り、手には箒を握っている。真っ赤な髪に、服の上から真っ赤なブラを着用し、ショートパンツを穿いてはいるが前が完全に開いているせいで赤い下着がチラチラ見え隠れするという奇抜な出で立ちだ。どこか大人びた顔つきをしており、その赤い眼の左側は眼帯に覆われている。赤い唇は妙に色っぽく、見つめているだけで魅了されてしまいそうだ。

「あちゃー、じゃありませんの！貴方の言う通りに進んだ私がバカでしたわ」

「むうー。そんなこと言われても……」
むくれるウィッチを見ていたら、怒るのも何だかバカらしくなってきた。

ため息をついて、どうしてこうなったのかを思い返す。

『タルタトス』からウィッチ達が生還したとき、辺り一帯は砂漠だった。冥府に行く前、ウィッチ達がドラゴンマミーに追い回されていた場所だ。

「こつちよー！」

右も左もわからない砂漠で、あまりに自信満々なウィッチに着いて行って、気が付いたら森の中で仲間達とはぐれていた。

「どうして私、こんなバカに……」

「だって、あのままあそこにいたら全員干からびちゃってたし……またカロンの川の水を飲むハメにならなかっただけ、感謝してほしいものね。後、バカって言うな」

「このまま野垂れ死にしても同じことですわ」

バーバ・ヤーガは、今日何度目かもわからない溜息をつくど、

「仕方ありませんわね。ウィッチ、魔力は充分でして？」

「うん。大丈夫だけど」

「なら、いったん近くの都市か村まで飛びましょう」

魔女である二人は、箒に乗って空を飛ぶことが出来る。飛行中は他の魔法の使用に、著しい制限がかかるが、それを差し置いても便利な魔法だ。

「え、でも、みんなを置いては行けないわよ」

「彼らなら、ちよつとくらいこんな森にいたって死にはしないですわ。それに、まだ月が輝くには時間がありましたよ」

「？ ああ、そういうことね」

意味ありげなバーバ・ヤーガの言葉の意味を、ウィッチは一瞬で察した。

今夜は満月。ウィッチの仲間であるワーウルフの力が、最もみなぎる日だ。

ワーウルフは新月の夜を除き、毎晩月に向かって必ず遠吠えする。バーバ・ヤーガは、その音を頼りに空から探そうと考えたのだ。

「流石ね。バーバ・ヤーガは」
そう言っ、ウィッチは手を伸ばした。

バーバ・ヤーガの頬に。

「えっ!?!」

右頬を柔らかい温もりが包む。

「え、え、え」

あまりに急なことに、バーバ・ヤーガは口をパクパク開閉させて混乱した。

やがて頬から伝わる温もりが、現実味を帯びて脳に伝わる。

(ど、どどどっということですよっ!)

次第に焦りが強くなる。

少し前までのバーバ・ヤーガなら、無理やりにもその手を払いのけていただろう。もしかしたら、魔法の一つや二つ、ウィッチにぶつけていたかもしれない。

だが今のバーバ・ヤーガには、それが出来なかった。動けなくなっ、交差した視線は硬直したように外すことが出来ない。伝わる温もりが心地よくて、自分を見つめる瞳が優しくして……

それになにより、バーバ・ヤーガは自分の気持ちに気づいていたから。

「う、ういっち?あの、その……」

下が上手く回らない。離してほしいのに、離してほしいはずなのに、『離して』のたった一言が出てこない。

すっと、ウィッチの顔が近づく。頬に添えられていた手は、いつの間にか首の後ろに回されていた。

(綺麗……)

ゆっくりと近づいてくるウィッチの顔を見て、素直にそう思った。目が離せない。

頬が熱くて、心臓の音がうるさくて、ウィッチに聞こえていないか心配で、緊張と不安が絵具のように混ざり合っぐちゃぐちゃになつて、ぎゅっと目をつぶった。

「……可愛いね」

「え?」

耳元で囁かれた吐息混じりのウィッチの声に、恐る恐る目を開ける。

チュツ。

「ッ!」

額に感じた、啄むような柔らかい感触で、バーバ・ヤーガは息をのんで飛び上がった。

「な、ななな、いきなり何を……」

「えー、別にいきなりじゃなかったと思うけど」

キスされた場所が熱い。まるで、そこを中心に熱が溢れ出ているかのようだ。

「い、いきなりですわっ! あ、あんな、油断させておいて……」

「私的には、むーど? って言うの? 意識してみたつもりだったんだけどなー」

ウィッチは悪戯っぽく笑いながら、さらりとそんなことを言った。

「ええっ!? そ、それっていったい……」

「さ、そろそろ行こっか」

首に添えられていた手が離れる。何事もなかったかのように、ウィッチは箒にまたがった。

「あ、あう……」

はぐらかされた。何だか余裕のあるウィッチの態度が悔しい。

「ほら。早く乗って」

「……後で覚えてなさい」

バーバ・ヤーガはツンとそっぽを向いて、ウィッチの箒の後ろの方にまたがった。手を自分の箒ごとウィッチの腰に回し、身体を密着させてしっかりとつかまる。

二人乗り。箒での飛行中、魔法の使用が制限されるウィッチをバーバ・ヤーガが補う。単純だが、ウィッチにしてはいい考えだとバーバ・ヤーガは思っていた。

(それに、こうやってウィッチに抱き着いているのは落ち着く……って、何を考えてますの私は)

一瞬自分の中で漏れ出した本音に、また顔を赤らめる。ウィッチに見られないように、うつむいて顔を隠す。

「いつもよりドキドキしてるわね。心臓の鼓動、すごい伝わってくる」

バーバ・ヤーガは無言でウィッチのお腹をつねった。

「い、痛い！痛いわよバーバ・ヤーガ」

「何ですの、その言い方。まるで、私が貴方につかまってるとき、いつもドキドキしてるみたいない方ね」

「え、だって事実だし……」

ぎゅっ。

「い、いだだだ！ごめん！ごめんってば」

「……わかればいいんですの」

バーバ・ヤーガは不満げにウィッチのお腹をつねる手を止めた。

「もう。赤くなっちゃったじゃない。……それじゃ、行くわよ？」

ウィッチが地を蹴って勢いよく飛び立つ。バーバ・ヤーガが唱えた魔法が木々の葉を破り、空への道を開いた。

「広いすわね」

眼下に広がる森を見下ろして、バーバ・ヤーガは目を丸くした。

見渡す限り、緑。緑。緑。見ているだけで緑色が嫌になりそうな広大な森だ。よくこんな場所に迷い込めたなと思う。

「どう？どこかに村ありそう？」

「少しお待ちなさい」

呪文を唱えて、視力を強化する。再び辺りを見渡した。

「……ありましたわ。北西の方に飛びなさい」

「りょーつかいっ」

ゆったりと筭が進み始めた。今日は風が少ない。穏やかな空の旅になりそうだ。

しばらくお互い何も言わず、風の音だけの静かな時間が続いた。

「ねえ、バーバ・ヤーガ」

「何ですか？」

「前から思ってたんだけどさ、私達って、そういう関係なんだろうね？」

「難しい疑問ですわね」

考えたこともなかった。この目の前のお気楽少女が、一体なんなのか。友達？敵？仲間？どれも正解なようで、なぜかしっくりこない。

「バーバ・ヤーガはさ、私のこと、どう思ってる？」

「急に言われても、答えにくいですわ」

「じゃあさ、好きか嫌いかだけでも教えてよ」

そんなもの、答えは当然決まっている。

嫌いなわけではない。

好きだ。大好きだ。この世の誰よりも何よりも、この身を焦がすほどにウィッチが好きだ。

けど、

「き、嫌いでは……なくってよ」

それが言えたら、恋愛はどれだけ楽か。

だって、言ったら多分ウィッチに嫌われる。ウィッチも多分私のことが嫌いではないけれど、それはきつと、あくまで『友達』とし

ての感情だから。

この関係が崩れるのは嫌だ。告白をして、ウィッチがもう二度と、まともに口を聞いてくれなくなったりしたら？考えたら堪らなくなつて、ウィッチの腰に回した手を少し強めた。

「バーバ・ヤーガ？」

「何ですか？」

「私はバーバ・ヤーガのこと、好きだよ？」

「……そうですの？」

その『好き』が、自分のそれと限りなく近くて遠いのが、悲しくて仕方がない。

「だからさ、そんな悲しい顔、しないで」

「えー!？」

さつき飛んでから今まで一度も、ウィッチはこちらを振り返っていない。見もせずに表情を見抜かれたことに、バーバ・ヤーガは驚きを隠しきれなかった。

「な、何で見てもないのに……」

「あは、やっぱりそんな顔してたんだ。ダメだよ？バーバ・ヤーガは可愛いんだから、笑顔が一番似合ってるわよ」

「か、かわい……」

今日二度目の可愛い発言に、バーバ・ヤーガは耳まで赤くなった。

「ふふ。赤くなってる。見なくても表情ってわかるんだね」

「あ、貴方……わ、私をからかって……」

「ごめんね。バーバ・ヤーガが可愛いから、つい」

「ま、またっ！私は可愛くなんかありませんわっ」

本当は、ウィッチに『可愛い』と言われると、身体の芯から熱くなるほど嬉しいのに、照れが先行して素直になれない。

「えー、そんなことないよ。バーバ・ヤーガは可愛いもん」

「ま、また……大体、可愛いなんて、それこそ貴方に似合いの言葉でしょうに」

「え?」

「あ」

しまったと思い訂正するが、

「ちよ、今のナシ、ですわ!」

「ダメ。聞いちゃった」

時すでに遅し。

「わ、忘れなさいっ!今すぐ忘れなさいっ」

「きゃっ!こら、暴れないでよ」

「わーすーれーなーさーいー!」

「ぎゃー!落ちる、落ちる!」

穏やかな空の旅は、続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3310z/>

ある日の二人

2011年12月11日13時47分発行